

ドイツ文化ゼミナール **Online-Alternative II** に参加して (T. Eki) [J]

2022年3月13日から15日の3日間、ドイツ文化ゼミナール **Online-Alternative II** が開かれた。もともと対面での実施が予定されていたドイツ文化ゼミナールは中止となり、その代わりに企画されたオンライン・ゼミナールである。このような形での開催は、前年に引き続き早くも2度目となる。コロナ禍がはや2年以上続き、オンラインの研究発表やワークショップもおなじみのものとなりつつあるとはいえ、文化ゼミの通常開催はやはり待ち遠しい。他では味わえない「非オンライン的」体験をもたらすのが、文化ゼミの醍醐味だからだ。とはいえ伝統ある文化ゼミが「別の可能性 (Alternative)」を模索しながら継続されることに、非常に大きな意義があるのは間違いない。日独学術交流の未来にとって重要だと言っても決して言い過ぎではないだろう。そして今回私が参加したオンラインの文化ゼミは、やはり他では味わえない貴重な「体験」をもたらしてくれた。

「タテシナ」という愛称を持つ文化ゼミは、通常ならば3月の半ば、長野県の蓼科に1週間弱こもって行われる国際的な研究発表および学術交流の場である。主にドイツから招かれる招待講師の講演、参加者による口頭発表、指定された文学テキストについて議論を行うグループワーク (**Gruppenarbeit**) から構成され、これらを全てドイツ語で行う。文学について一流の研究者たちと長い時間をかけて議論できるまたとない機会であり、若手の参加者にとっては修練の場でもある。参加者は中国や韓国からも訪れ、日本では首都圏を中心に全国各地から、世代も大学院生から、若手、中堅、大御所の先生まで満遍なく集うため、縦と横の交友を広げるという意味でも非常に大きな役割を果たしているように思う。

今回も当初は通常開催に向けたアナウンスが行われていたが、2022年の年明けにコロナウイルスの感染再拡大(第六波)が始まった段階で、オンライン開催に移行する通知が出された。私は内情を知らないものの、会場の問題やプログラムの組み直し、関係者との協議、交渉等々、その大変さは想像するに余りある。事前の連絡や課題テキストの公表等々、準備から会の運営をすべて滞りなく進めていただいた実行委員の方々に、改めて感謝と称賛を送りたい。

今回のプログラムを紹介しておく。統一テーマは前年に引き続き **Phantastische Literatur** で、招待講師も同じくベルリン自由大学の教授 **Hans Richard Brittnacher** 先生だった。日程は全3日間に短縮され、**Brittnacher** 先生はプログラム全体の基調となる講演を初日と最終日に行い、その間に **Gruppenarbeit** が計4回行われた。開催時間はドイツとの時差を考慮して日本時間の夕方4時ないし5時から、休憩を挟みつつ夜の9時ごろまでだったが、その後に **Zoom** のブレイクアウトルームで自由に歓談できる場も設けられ、私を含む多くの参加者が「感想戦」に興じ、交流を深めることができた。このプログラムは驚くほどの確に構成されており、ストレスなく全行程に参加することができた。

幻想文学、あるいは幻想的なものをめぐる議論は、トドロフやカイヨワのものが比較的知られているが、現在にいたるまで分野を超えて拡張し続けている。Brittnacher 先生はこれを簡潔明瞭に概観した上で、しかしこの理論が百出する状況が幻想文学の可能性をむしろばやけさせてしまう混乱状況だと批判する。そしてオッカムの剃刀よろしく幻想文学の定義を極限まで削ぎ落とし、現実的なものとそれを超えたもの間に生じる「障害 (Störung)」——これは驚愕、混乱、破壊をもたらす作用 (Aufstörung, Verstörung, Zerstörung) と結びつく——という概念を提唱する。この明快なテーゼは、我われの Gruppenarbeit を含む議論全体に骨格を与えただけでなく、幻想文学のもともと持っているポテンシャル、つまり想像力が持つ先取りの力、世界の危機に対する地震計的感性に、改めて注目しようと呼びかける主張でもあった。

ところでジャンル研究は、ある作品がそのジャンルに含まれるか否かという基準の議論にはまり込んで、味気ない議論に終わってしまうという印象もある。しかし文学史における未知の水脈を探知したり、従来とはまったく違う読解の視点を与えたりする「発見術 (Heuristik)」としては、依然として優れた可能性を秘めている。今回このことを改めて認識した。プログラムの最後を締め括る講演では、幻想文学と「沼 (Sumpf)」——海でも陸でもない〈非土地〉のトポス！——というユニークな連関から、さまざまな作品が新しい相貌で立ち上がるのを目の当たりにした。さらにその後の質疑では、この系譜に連なる別の作品が提案されたり、「湿地 (Moor)」との関係が問われたり、また泉鏡花の名が出るなど高度に刺激的な議論が行われた。

しかし「発見術」としての幻想文学研究の特性がいかんなく発揮されたのは、Gruppenarbeit においてだっただろう。各回にテーマ設定された全4回にわたる議論——テーマは順に空間、時間、形象、ユートピア (Raum, Zeit, Figuren, Utopien) ——でさまざまなテキストが取り上げられたが、その読解と討論は多くの発見に満ちたものだった。テキストの作者にはテイク、ホフマン、クライストといった「いかにも」な作家はもちろん、シラー、ジャン＝パウル、カフカなど意外な顔触れもある。ヨハン・ゴットフリート・シュナーベル、マリー・ルイーゼ・カシュニッツなど、(私にとって) 未知の作家もいる。これらのテキストにおいて幻想的なものの「障害」が発生する場所が探り当てられ、それが新しい作品理解につながり、きわめて刺激的な体験をもたらしてくれた(こう書くと課題テキストを全部読んだように聞こえるが、もちろん私に割り振られたグループの指定テキストしか読んでいない…)。ところで Gruppenarbeit を本格的に導入したことは、今回の大きな挑戦だったように思う。昨年文化ゼミでは講演と口頭発表のみで、Gruppenarbeit は行われなかったからだ(この辺りの経緯については、昨年高田梓さんのコラムを参照)。結果的にこの試みは成功したように思う。オンラインでのディスカッションは、対面でのより充実したやりとりを切望させるものであったとしても、不満を感じさせるものでは全くなかった。主に若手が務めていた印象のある GruppenleiterIn (司会進行役) の活躍も印象的だった。

最後に話が変わってしまうようだが（どのようにつなげればいいのか）、コロナ禍における移動、交流の大きな制限に加え、2月から続くロシア軍のウクライナ侵攻によって国際社会の秩序が踏みにじられ、国家間の分断が深刻化する状況が続いている。ちょっとしたネットの通信障害にも、サイバー空間でも行われている戦争が脳裏に浮かぶ。参加者はそれぞれ複雑な思いを抱えていたと思う。しかし、実行委員長の桑原聡先生が冒頭の挨拶で、こうした状況に対する困惑や失望を隠さずに、それでも文学的想像力の重要性を訴えたことに、深い共感とともに強く励まされる思いがした。幻想文学がまさにそうあるように、文学はその想像力によって、「平時」から世界の危機に対して地震計的感性を研ぎ澄ませてきた。混迷を極める世界において、文学の時間はときに残酷に思えるほど長く、遅い。しかし文学に携わる人間は、危機的状況が雪崩を打って押し寄せるなかで、危機への想像力を「いつもどおり」発揮しつづけなければならないのではないか。今回の文化ゼミの開催と「幻想文学」というテーマは、こうした状況にあってなお、あるいはこうした状況だからこそ、時宜を得たものだったと思う。

益 敏郎（熊本大学准教授）

0186

作成日 : 2022/04/25